日蓮聖人の報恩精神を現代に活かすことが祖恩に報酬する道である――日蓮聖人第七百遠忌をめざして、日蓮宗では〈報恩の教化活動〉が推進されている。現宗研が「現代宗教研究」第十号に発表した「恩の構造」は、日蓮聖人の報恩の教えを明らかにし、恩の歴史的展開をとらえつつ真の報恩精神を現代化しようとする内容を提示するものであった。「恩の構造」は、遠忌報恩の指針を示すものとして全宗門的に受けとめられ、宗務院を通じて全力寺に別冊刷で配布されたのをはじめ教化研究会議においても「恩の構造」を中心に研究討議をつみ重ねて〈報恩教化〉の自覚と具体化を図ってきた。さらに遠忌特派布教の展開にともなって、日蓮聖人の報恩精神が布教の場で説かれ弘められてきている。ここに掲げる一文は、全国にわたって遠忌報恩の内容を弘通するために献身されている二師が、その活動を通してまとめられたものであり、今後〈報恩教化〉を一層信仰的に生活化、具体化していくための論文として、ここに掲載するものである。―編集部註

報恩思想の徹底―知恩報恩を論ず

石川泰道

遠忌を迎える基本姿勢

本題の〝報恩思想の趣旨徹底とその方策〟について論ずる前に順序として、まず宗祖七百遠忌を迎える私達の姿勢とでも申しましょうか、「どこに主点を置いてその方策を建てるか」という、その基本的態度というものを、明確にして置く必要があると思います。

そこで、これを大別すると次の二つにわけることができると思うのであります。

一、遠忌を事業と行事とを中心に考え、これを主点に置いて方策を建てる。

二、世の中も変化の時代から変革の時代へと移ったといわれているが、宗門もこの辺で根本的にその体質を改革し、新しい時代への脱皮を考え、ここに主点を置いて方策を建てる。

前者は、申すまでもなく、個々のお寺なり、教会なり、また宗門なりが行なう、記念（報恩）事業とか行事をいうわけですが、これだけで、もし七百遠忌こと足れりとするならば、余りにも情けない限りで、ことばでは具体的にこうした方がとはいい表わせなくても、誰もが希い、誰もがいま求めているのは、前者ではなく、後者の新しい時代への脱皮であり、目先だけの誤魔化しでなく、われわれ僧侶も、そして宗門も真に裸になって前進しようとする姿勢こそ、七百遠忌を迎える私達の基本的態度でなくてはならないと思うのであります。

去る昭和五十二年一月二十八日に池上で七百遠忌特派布教師の結団式がありましたが、その席上でもこの点を特に強調すると共に多くの方々からも、私のこの意見に共鳴をいただきました。まずこうした基本姿勢に立って、論を進めてまいりたいと存じます。

知恩・報恩思想の分析

ところで、このところ中央をはじめ全国各地で、教研会議とか布教講習会、研修会とかその他いろいろな集りで、「知恵・報恩」についてだいぶ語り合い、論議されてきたようであります。

私は、その一つ一つに顔を出したわけではありませんから、全部の様子はわかりませんが、それら会議の記録や発言の要旨を印刷したパンフレットなどで拝見したり、いろいろな方の声をもれ伺うところでは、どうも「知恩・報恩」というものの受けとめ方を、だいぶ混線して捉えておられるようです。

それは「恩」というものを、従来の道徳的・倫理的考えで捉えるのと、宗教的・法華経的立場で捉えるのとでは、まったく恩そのものの受けとめ方が違うということを、無視しての結果といえましょう。

ご承知のように、私共が恩というものを口にする場合、すぐ浮かんでくるのが「親には孝、国には忠」という古くからの考えです。尤も今の若い方は別でしょうが……。ところが、こうした報恩観と申しますか、恩に対する認識というものは、極めて儒教的倫理観、道徳観によるものが強く、凡そ、仏教的、法華教的捉え方ではない、否、日蓮聖人の報恩観からするならば、まったく逆な考え方であると

もいえるからであります。実は、これを混同している方が非常に多いということであります。

儒教的な倫理道徳というものは、従来よりいわれている「仁・義・礼・智・信」という五徳とも五常ともいうものが、その根幹をなしています。故に儒教の教えというのは、まず仁より入り、義・礼・智・信と続くものであります。即ち、仁とは「おもいやり、いつくしみ」というような意味になりますが、要するに人に接する姿とか態度、極論すれば形なり人となりから入っていく、これがどうも儒教的な倫理道徳ではないかと思うのであります。

江戸時代の武家社会で「武士は食わねど高楊子」といって、内実どんなに困っていても表は崩さないという、これなど儒教的な考えといえるのではないでしょうか。

ところが、仏教の場合はこれとはまったく逆で、儒教でいう一番下の信から入っていくということであります。

たとえ身は貧しくとも、どんなボロをまとっていても、心に仏を信ずるという一念があれば、すべてはそこから解決されていく、これが仏教の考え方であります。尤も仏教も長い歴史の中で、儒教の影響を多分に受け、だいぶおかしくなっているのもあります。こうしたことから仏教本来の恩思想というものも、誤って受けとめられているということが多分に感じられます。そこで、私達が恩を論ずる場合、道徳的、倫理的に考える恩と、宗教的、法華経的に考える恩とを、区別して論じなくてはならないと思うのであります。いわゆる世法的と仏法的といいましょうか、世間的と出世間的とでもいいましょうか、ともかく、この点を一応整理してかからなくてはならないと思うのであります。

したがって、今日ここで論じますのは、もちろん前者ではなく、当然、後者の仏法的、法華教的立場に立っての恩というものに眼を向けてまいりたいと存じております。

ところで、もしここで破壊的な言い方をすることが許されるならば、四年後に七百遠忌をお迎えするからといって、慌てて恩がどうだとか、報恩がどうだとかということ自体、実は本化の教団としては、まことに可笑しなことで、正直申しまして裏を返えせば、それは私達自身が常々「恩」というものを忘れていたという証左でもあるのではないかと思うのであります。

ともかく、こうした現状を認識の上で、報恩思想の普及を図ろうとするならば、むしろ報恩そのものを強調する前に、なぜ恩に報いなくてはならないのか、なぜ恩として感じなくてはならないのか、なにが恩なのかを明らかにしなくてはならないと思うのであります。

宗祖の報恩観

大聖人が「恩」というものを、どのように受けとめられておられたか、その基本的姿勢とでも申しましょうか、そ

れは祖書の随所で窺い知ることはできますが、中でも一番わかりよいのが、次に挙げる『報恩抄』ではないかと存じます。

「夫れ老狐は塚をあとにせず、白亀は毛宝が恩を報ず、畜生すら斯くの如し、況んや人倫をや。されば古への賢者予譲といゝし者は、剣を呑みて智伯が恩に充て、弘演と申せし臣下は、腹を割いて衛の懿公が肝を入れたり。何かに況んや、仏教を習わん者、父母・師匠・国恩を忘るべしや。」(1192)

このご文章は、報恩抄の冒頭に掲げられた有名なお言葉で、仏教を習う者の報恩を明らかにするために、まず狐や亀などの報恩の例を挙げ、畜生ですら恩にこたえることを知っている、まして人間なら恩を忘れるなど、とんでもないことである。さらに予譲・弘演などという昔の賢人の例を挙げ、人の道を明かし世間の報恩を述べ、特に仏教者としての報恩の対象として、父母、師匠、国の恩を忘れてはならないと論されておられます。

いわゆる大聖人は、恩を報ずるということは、生あるものの自然的態度であり、人間としての基本的姿勢であり、さらに仏教者の根本的行動とみて、いうならば当り前のこととご覧になっているのであります。

ところが、こう申しますと、大聖人を多少でもご存知の方は、その言動に少なからず矛盾があるのではという、疑問を感じられると思うのであります。と申しますのは、「恩」というものを、従来からの考え方からみますなら、父母には孝養、師匠には従順、国主には忠節でなくてはならないという、いわゆる総て従っていくことが、倫理道徳の上から当り前とし、基本と考えるからであります。だが、大聖人のご生涯を拝見しますと、これとは逆にご両親には背き、お師匠さんには逆い、国主からは疎まられ、そのうえ大衆からは憎まれ、而も多くの迫害を受けられた。こうした方が、恩だとか、報恩などということを口にすること自体、おかしいではないかという疑問がここにでてくるからであります。

この疑問に答えられたのが、同じ『報恩抄』の次のご文章であります。

「是非につけて出離の道を弁へざらん程に父母・師匠等の心に随うべからず。此の義は諸人思わく顕にも外れ冥にも叶うまじと思う。然れども外典の孝経にも父母・主君に随わずして忠臣・孝人となるようも見えたり。内典の仏経に云く『恩を棄て無為に入るは真実報恩の者なり』等云々。比干が王に随わずして賢人の名を取り、悉達太子の浄飯大王に背きて三界第一の孝となりし是れなり。」(1192)

仏法を習うものは、出離（さとり）の道を弁えない限り、

どんなことがあっても父母・師匠・国主などの心に随わないという覚悟がなくてはならない。こういうと世間の人達は、それは礼儀にもはづれ、仏の教えにも背くもので、おかしいではないかというかも知れません。だが、儒道の孝経にも、父母・主君を諫め、その心に背いて、かえって忠臣・孝子となると記されています。さらに仏法の経文にも『父母の恩を棄てゝ仏道に入るのが、かえって真実の報恩である』と説かれています。昔、殷(いん)の紂王(ちゅうおう)に随わないで、これを諫めた比干が、かえって賢人といわれ、父の浄飯王に背いて出家された悉達太子（お釈迦さま）が、三界第一の孝子といわれたのは、即ちこのことでありますよと、世間並びに仏教の例証を引いて疑問を解かれています。

このことは、次の『聖愚問答抄』にも、

「父母の命に背きて無為に入り、還て父母を導くは孝の手本なる事、仏その証拠なるべし。」(379)

と仰せられ、また文永十二年の「王舎城事」(917)「兄弟抄」(928) 等にも同じようなことを述べておられます。

要約すると、いわゆる仏法でいう真実の孝養なり報恩というものは、世間でいう倫理道徳的なものではなく、成仏そのものにあるのだ。だからこそ『棄恩入無為・真実報恩者』なのだと述べられ、これを仏教者の基本的立場とされたのであります。

ここに宗祖は、仏法的・法華経的報恩観を打ち立てられたとみるべきではないかと思うのであります。

感恩の基調

ところで、恩を報ずるという心が生まれるには、報恩という前に、恩を感ずる、又は恩に感ずる、即ち、感恩というものがなくては出てまいりません。大聖人が何にを恩と感じ、その恩をまたどのように受けとめられたか。いうならば感恩の基調とでも申しましょうか、とらえ方を知る必要があると思うのであります。

それを端的に示されたのが、伊豆御法難によりご流罪中の弘長二年正月十六日に、伊豆の伊東より房州天津の工藤吉隆公に与えられた『四恩抄』であります。

この四恩抄と申しますのは、正直に申しまして御真蹟は現存いたしません。古写本もございません。従って文献学的に申しますなら、残念ですが第一資料として使うわけにはいきません。しかし内容的な面から見ますと、その文意、文勢、文体共に大聖人ならずしては表現し得ない内容と思っております。

そうした意味に於て、『四恩抄』というのは、やはり貴重な祖書の一つと私は拝しておりますが、その冒頭に、

「抑も此の流罪の身になりて候につけて二つの大事あり。一には大なる悦びあり。……二には大なる嘆きあり。」(233)

と仰せになっておられます。即ち、大聖人は、この伊豆のご流罪によって二つの大事を得られた。その一つは大きな悦びであり、もう一つは大きな嘆きであるといわれています。

さて、はじめの大きな悦びとは、なにを指しておられるのかと申しますと、法華経を行ずる者の多難なることを、『法華経』の「法師品」の、

「如来の現在すら猶怨嫉多し、況んや滅度の後をや。」

の文を挙げられ、始めにこのお経文を拝見した時には、まさかそれほどのことはあるまいと思っていたが、今日こうして流罪の身となってみると、仏のお言葉は偽りではなかったと思い知りましたと述べ、次の如く仰せになっておられます。

「日蓮は、させる妻子をも帯せず、魚鳥をも服せず、只法華経を弘めんとする失によりて、妻子を帯せずして犯僧の名四海に満ち、螻蟻をも殺さざれども悪名一天に弥れり。恐らくは在世に釈尊を諸の外道が毀り奉りしに似たり。是れ偏へに法華経を信ずる事の余人よりも少し経文の如く信をもむけたる故に、悪鬼その身に入りてそねみをなすかとをぼえ候へば、是程の卑賤・無智・無戒の者の、二千余年已前に説れて候法華経の文にのせられて、留難に値うべしと仏記しをかれまいらせ候事の、うれしさ申し尽し難く候。」(236)

日蓮は妻子をも持たず、生臭いものすら口にしたことがありません。ただ法華経を弘めようとした為めに破戒の僧といわれ、小さな虫けら一つ殺さないのに悪名天下にひろまってしまいました。これは恐らく日蓮が他の人よりも、法華経を信じ、法華経の心にかなったから、その経文に説いてあるように、悪魔が人々の身に入って怨を為すのではないかと思います。それにしても、こんな賤しい無智無戒の者の為に、仏さまは二千年も昔に法華経で予言をくださり、またそれに違わず難に値うかと思うと、そのうれしさは言葉にいいようがありませんと、こう仰っしゃっているのです。

さらにこのお言葉に続いて、日ごろ法華経を信ずるといっても、仲々心ゆくまでこれを読むという機会は少ない。だが、ここに流罪になったお蔭で、行住坐臥に法華経を読み修行をする機会に恵まれました。「人間に生を受けて、是程の悦びは何事か候べき」と、感涙と悦びを満面に表わして語っておられます。

さらに凡夫の習いとして、自分から進んで菩提心を起し、後生を願うといっても、一日のうち、ほんの一時か二時のこと。だが今のこの流罪の身は、「思い出でざるにも御経をよみ、読まざるにも法華経を行ずるにて候か」と。いやでも毎日々々の生活が御経を読み、読まないでも法華経を

修行しているようなものです。「是程の心ならぬ昼夜十二時の法華経の持経者は、末代には有りがたくこそ候らめ。」と。こんなに有難く尊いことはありませんと、流罪の生活があったからこそ、法華経を身で読むことができ、行ずることができたのだと感謝されておられるのであります。

また、さらにこの上もなく有難いことは、この日蓮は過去にきっと何回も生まれかわり、そのたびごとにいろんな国王にもあったことでしょう。しかし、よもや法華経流布の国に生まれて、法華経の御名を聞いて修行し、法華経を行じてざん言され、国主から流罪にされたなどという事は、未だ曾って一度もなかったことと思います。だが、法華経の安楽行品に「是の法華経は、無量の国中に於て、乃至名字をも聞くことを得べからず、何に況んや、見ることを得、受持し読誦せんをや」とあるように、この法華経に会いまみえたという、この悦び、この有難さはどこから得ることができたのでしょう。そうです、この悦びこそ流罪のお蔭ではないですか。してみると、この流罪となったのは、わが身を憎みざん言した人がいて、そのざん言によってわが身を流罪にした国主がいたからではないでしょうか。

さて、こう考えてまいりますと、わが身を憎みざん言した人、そして流罪にした国王こそ、実は日蓮にとっては大恩人であると言うべきでしょうと述べておられます。

なんと素晴しい見方でしょう。

流罪生活を感謝生活に転じ、その感謝をざん言の人と迫害の国主に向け、恨むことなく、かえって大恩人と掌を合されておられる、この受けとめ方こそ、宗教的感恩の基調をなしているといえるのではないでしょうか。ここに「大なる悦び」といわれた所以があると思うのであります。

次にもう一つの大事として、「大なる嘆き」があると仰言っておられます。

その嘆きというのは、『法華経』の「法師品」に、

「若し悪人あって不善の心を以て、一却の中に於いて現に仏前に於いて常に仏に毀罵せん。その罪なお軽し。若し人一つの悪言を以って、在家・出家の法華経を読誦する者を毀訾せん。その罪甚だ重し。」

と説かれている如く、若し悪人の者がおって、悪い心を起こして、永い間仏様の前でまのあたり仏様を毀るとも、その罪は、まだ軽い。しかしながら、仏様の滅后に於いて、法華経を読誦する僧や俗に対して、悪口雑言をいったり、毀ったりしたならば、その罪はどれだけ重いかわからないというお経文を挙げて、次のように述べておられます。

「此れらの経文を見るに、信心を起し、身より汗を流し、両眼より涙を流すこと雨の如し。我れ一人、此の国に生まれて、多くの人をして、一生の業を造らしむ事を嘆く。」(240)

今このお経文を拝していると、自分一人がこの国に生ま

れ、法華経を行じたが為に、多くの人に正法を謗る罪をつくらせてしまった。そう考えると、はたして私がこの世に生まれたのが善かったのかどうか、身から汗の出る思いです。而も、その罪を犯した人たちが、やがては無間地獄に堕ちるかと思うと、唯々嘆かわしくて涙があふれるばかりです。実は、「大なる嘆き」といったのは、このことなんですよと、こう仰言っておられるわけであります。

さて、大聖人の宗教は、知恩・報恩がその基調となっているとよくいわれますが、少なくもその根底には、この『四恩抄』を始め、多くの御書からも窺い知ることのできる宗祖の測り知れない大慈悲心が、そのすべてをなしているといっても過言ではないと思うのであります。

実は、我れらが仏教者の感恩の基本も、この慈悲憐愍の心を根底としたその中からこそ生まれるのだということを、よくよく知らなくてはならないと思うのであります。

四　恩

ところで宗祖は、この『四恩抄』で初めて四恩を挙げて説明をなさっておられます。

「一には一切衆生の恩、一切衆生なくば衆生無辺誓願度の願を発し難し。又悪人無くして菩薩に留難をなさずば、いかでか功徳をば増長せしめ候べき。

二には父母の恩、六道に生を受くるに必ず父母あり。その中に或は殺盗・悪律儀・謗法の家に生れぬれば、我とその科を犯さざれどもその業を成就す。然るに今生の父母は我を生みて法華経を信ずる身となせり。梵天・帝釈・四大天王・転輪聖王の家に生れて、三界四天をゆづられて人天四衆に恭敬せられんよりも、恩重きは今の某が父母なる歟。

三には国王の恩、天の三光に身をあたゝめ、地の五穀に神を養うこと、皆是れ国王の恩也。その上、今度法華経を信じ、今度生死を離るべき国王に値い奉れり。争か少分の怨に依ておろかに思い奉るべきや。」

(237～238)

さて、以上は四恩のうち一切衆生、父母、国王の三つを挙げたわけですが、ここまでをご覧になって、私達が従来から聞かされてきた一般の道徳、倫理の上から見る恩の考え方とは、だいぶ開きのあることにお気付きになったことと思います。否、むしろ恩に対する考え方、受けとめ方と申しましょうか、視点が全く違うのではとおおもいになったのではないかと存じます。

実は、初めに仏法的、法華経的と申したのは、このことなのであります。

而も、宗祖は、五濁悪世の中にいる衆生は、煩悩五欲の為道に迷っているので、まず、その道を正し、法華経の世界から人倫の道を示し、仏と衆生との関係を規範として、

恩を説かれようとされたのであります。そのことは、次に述べます『三宝の恩』の中の「仏恩」を見ても明らかなことであります。

ところで、四恩の最後が「三宝の恩」なのですが、三宝といえば仏・法・僧の三宝をいうことはおわかりと存じます。そこで、ここでは時間の関係から、仏恩について『四恩抄』で述べておられることを、わかりやすく要約して申し上げます。

ご承知のようにお釈迦さまは、無量劫の永い間、菩薩の修行をされた時、沢山の福徳を積まれました。ところがその福徳を六十四に分けて、その一分だけをご自分の為に用いられ、余りの六十三の福徳は、この世に留め置いて下さったというのです。

それは、なんの為かというと、末世に至って世の中が乱れたり、間違った教えがはびこったり、正法を謗る者が国中に充満したり、多くの神様がその力を失ったり、この世のありとあらゆる自然現象から、生物、科学はもとより、政治、経済、教育を始め精神界の分野まで、どこか狂い出して、もう誰れもが手がつけられなくなって、どうしたものかという事になった時、お釈迦さまのお弟子との自覚をもって立ち上る者の命のささえとしようと誓われて、のこして下さったものだというのです。

なんと有難い大慈悲ではありませんか。

また、お釈迦さまは、本来百二十才まで長生きのできる寿命をお持ちにもかかわらず、八十才にしてご入滅になり、残りの四十年の寿命を私達の為に遺して下さったのだというのです。

故に、こうしたお釈迦さまのご恩は、「四大海の水を硯の水とし、一切の草木を焼て墨となして、一切のけだものの毛を筆とし、十方世界の大地を紙と定て注し置くとも、争か仏の恩を報じ奉るべき。」と、どうやって書きしるそうとしても、到底お釈迦さま（仏）のこのご恩を書き尽すことができぬ程の大恩と申せましょうと、こういわれているのです。

さて、こうみてまいりますと、一切衆生、父母、国王の恩もさることながら、仏の恩に対する宗祖の情感あふるる感恩の披瀝こそ、宗祖独自の報恩観といえましょう。

ただ、ここで注意をせねばならないのは、四恩の出典についてであります。これは『四恩抄』でも明らかな如く、『心地観経』（大乗本生心地観経第二）を典拠として説かれているということであります。

このことは、ともしますと間違いやすく、ある布教師さんのお説教を伺っておりましたところ、「世に四恩あり、父母の恩、一切衆生の恩、国王の恩、三宝の恩これなり、宗祖初めてこれを説かる」なんて、得々となってお話をしているのを拝聴したことがあります。

確かに今までお話したように、大聖人の恩に対する考え方は、他の人とは異なる独特なものがありますが、この四恩については、古くから他の宗派の開祖、高僧なども心地観経をもとに述べておられるということであります。例せば、弘法大師空海が『性霊集巻八』というのに、同じように四恩を説いています。さらに面白いのは、『平家物語』の第二、第三にも出ておるようです。それから、『源平盛衰記』の第六にも、同じように四恩が挙っておるようです。

ただ、その内容になりますと、『心地観経』を敷延したに過ぎず、大聖人のような独自な思想は窺うことができません。

ここで参考までに『心地観経』の四恩を、わかりやすく表にして、次に掲げてみたいと存じます。

報恩の生涯

ところで、こうした大聖人独自の報恩観は、一体何処から出てくるのでしょうか。

それは、法華経の世界の中に、大聖人自らも住すると共に、一切衆生をも、住せしめることを前提として説かれているからであります。その為めに大聖人は、法華経を常に鏡とし、釈尊をお手本とされていたということであります。

さきに挙げた『報恩抄』の「悉達太子の浄飯大王に背きて、三界第一の孝となりしこれなり」など、そのよい例と申せましょう。

ご承知のようにお釈迦さまは、出家するに当ってはご両親に背いて出家されておられます。しかし、それは、本来ご両親に対して、真実の報恩をなさんがめのお気持ちからであったのです。その為めにお釈迦さまは出家をされ、苦修錬行をなさって、遂に成道されました。そして成道後、四十余年の間、大小権実の諸経を説かれましたが、その本懐は未だ達せられませんで、最後八ケ年の一切衆生皆成仏道の『法華経』に至って、始めて本懐を遂げられたわけであります。

実は、さきほど申しましたお釈迦さまのご両親に対する真の報恩、真の孝養は、ここに至って完成したと見るのであります。

それは、『法華経』の「提婆品」で説くところの悪人達多の成仏をもって、一切の男子の成仏が確立されたとみ、それは即、慈文の成仏の完成とみ、また、竜女の成仏の時に、一切の女人の成仏が確立され、悲母の成仏が完成したと見るのであります。

このことは、大聖人も『開目抄』で、次のように述べておられます。

「儒家の孝養は今生にかぎる。未来の父母を扶けざれば、外家の聖賢は有名無実なり。外道は過未をしれども父母を扶る道なし。仏道こそ父母の後世を扶くれば

父母の恩
- 父に慈恩あり
- 母に悲恩あり
- 母に十徳あり
  - 一を大地と名づく
    母体の中に於いて所依となるが故なり。
  - 二を能生と名づく
    衆苦を経歴して能く生むが故なり。
  - 三を能正と名づく
    母の手を以て五根を理するが故なり。
  - 四を養育と名づく
    四時の宜きに随って能く長養するが……
  - 五を智者と名づく
    能く方便を以て智慧を生ずるが……
  - 六を荘厳と名づく
    妙瓔珞を以て厳飾するが故なり。
  - 七を安隠と名づく
    母の懐抱を以て止息となすが故なり。
  - 八を教授と名づく
    善巧方便して子を導引するが……
  - 九を教誡と名づく
    善言辞を以て衆悪を離れしむるが……
  - 十を与業と名づく
    能く家業を以て子に付属するが……

衆生の恩

一切の衆生は、無始已来、転じて百千劫を経たり、故に、多生の中に於て互に父母となる。互に父母となるを以ての故に、一切の男子は即ち是れ慈父なり。

一切の女人は、即ち是れ悲母なり。昔の生々の中に大恩あるが故に、猶ほ現在の父母の恩の如く、等しくして差別なし。是の困縁を以て、諸の衆生の類には、

一切の時に於て、亦、皆、大恩あることを知るべし。

国王の恩

その国界に於いて、山河大地より大海の際を尽して皆、国王に属す。王、若し正治を失はゞ、人に所依なく、若し正化を以てせば、八大恐怖、その国に入らず。是の困縁を以て十徳を成就す。

三宝の恩

仏宝

▼仏宝に三種の身あり

- 自性身に大断徳あり
- 受用身に大智徳あり
- 変化身に大恩徳あり

▼仏宝中に六種の微妙の功徳を具足す

- 一には、無上の大功徳田あり
- 二には、無上にして大恩徳あり
- 三には、無足・二足及び多足の衆生中の尊なり
- 四には、極めて値遇し難きこと優曇華の如し
- 五には、三千大千世界に独一出現す
- 六には、世、出世間の功徳円満し一切義の依なり

是の如き等の六種の功徳を具するに依りて、常に能く一切の衆生を利楽す。是れを仏宝不思議の恩と名づく。

法宝に四種あり。

法宝
- 教法
- 理法
- 行法
- 果法

是の如きの四種の法宝は、衆生を引導して生死の海を出でゝ彼岸に到らしむ。

凡そ諸仏の師とする所は、即ち是れ法宝なり、三世の諸仏は、法に依りて修行し、一切の障を断じて菩提を成ずることを得、未来際を尽して衆生を利益す。

故に諸仏は、常に能く諸波羅密、微妙の法宝を供養す。何に況んや、衆生は未だ解脱を得ずして、而も能く微妙の法宝を敬せざらんや。是れを法宝不思議の恩と名づく。

僧宝
- 菩薩僧……文殊弥勒等は菩薩僧なり。
- 声聞僧……舎利弗・目犍連等は、声聞僧なり。
- 凡夫僧……別解脱戒を成就し、乃至一切の正見を具足して能く広く他の為に衆の聖道の法を演説開示し、衆生を利楽するは、凡夫僧なり。

是れを僧宝不思議の恩と名づくと云へり。

此の中、一往之を分たば、前の三恩は、是れ世間の恩、後の一は是れ出世の恩なり。若し尅論せば、四恩、並びに皆、世・出世に通ずるなり。

聖賢の名はあるべけれ。しかれども法華経已前等の大小乗の経宗は自身の得道猶かなひがたし。何に況や父母をや。但文のみあて義なし。今法華経の時こそ、女人成仏の時、悲母の成仏も顕われ、達多の悪人成仏の時、慈父の成仏も顕わるれ。此の経は内典の孝経也。」(590)

即ち、お釈迦さまにあっては、一切衆生の皆成仏道が、ご自身の成仏であった如く、一切男子の成仏を以って、慈父の成仏となし、また、一切女人の成仏を以って、悲母の成仏とされたのであります。

故に、この世の一切の男子に孝養を尽すことが、実は自身の父への孝養であり、一切の女人に対して孝養を尽すことが、とりもなおさず我が母への孝養であるとされたのであります。

こうした考えが、次の『千日尼御前御返事』に、的確に述べておられます。

「但、法華経計りこそ女人成仏、悲母の恩を報ずる実の報恩経にては候へと見候しかば、悲母の恩を報ぜんために、此経の題目を一切の女人に唱へさせんと願す。』(1542)

いわゆる、宗祖もこの世の一切の男女を、わが父母とみて孝養を尽されようとして、五字七字のお題目を、一切衆生の口に入れんとご苦難の日々をおくられたのであります。

これこそ宗祖が、釈尊をして三界第一の孝子とし、報恩第一の方として、お手本とされた所以がここにあると思うのであります。

こうした考えを基調として、宗祖の実践されたものを、六つに分けてみたのが、教学上よくいう「学問報恩・開宗報恩・国諫報恩・値難感恩・得証報恩・代受苦報恩」というものであります。

大聖人は、ご承知の如く十二才で清澄に登り、十六才で出家得度をされています。そして数多くの学問をし仏教の奥義を究められたのですが、その目的は、次に挙げる『佐渡御勘気抄』の、

「本より学文し候し事は、仏教をきはめて仏になり、恩ある人をもたすけんと思う。」(510)

の願いがあったからで、いいかえれば人類総てを救わんとされたのであります。

そこで学問をするに当って、清澄山の虚空蔵菩薩に「日本第一の智者となし給え」と願を立てたのは、有名なお話であります。そのご恩とお師匠さまへのご恩報じのために立教開宗されたのだということは、次の『善無畏三蔵抄』、『清澄寺大衆中』などで、お述べになっておられます。

善無畏三蔵抄

「日蓮は安房の国東条の郷・清澄山の住人也。幼少の時より虚空蔵菩薩に願を立て云く、日本第一の智者と

なし給へと云々……。此の諸経・諸論・諸宗の失を弁へる事は、虚空蔵菩薩の御利生、本師道善御房の御恩なるべし……。此の恩を報ぜんが為に、清澄山に於て仏法を弘め、道善御房を導き奉らんと欲す。』(473)

清澄寺大衆中

「此を申さば、必ず日蓮が命となるべしと存知せしかども、虚空蔵菩薩の御恩を報ぜんがために、建長五年四月二十八日安房国東条の郷清澄寺道善之房持仏堂の南面にして、浄円房と申す者、並に少々の大衆にこれを申しはじめて、其後二十余年が間、退転なく申す。」(1134)

しかし、爾来、大聖人は鎌倉に法憧をかかげ、法華折伏・破権門理の諫暁をせられ、殊に国諫第一たる安国論の奏上こそ、次の『安国論御勘由来』に示す「国土の恩を報ぜんが為め」にほかならないと、お述べになっておられます。

「日蓮、世間の体を見て粗一切経を勘ふるに、御祈請験し無く、還って凶悪を増長するの由、道理文証之を得了んぬ。終に止むこと無く勘文一通を造り作して、その名を立正安国論と号す。文応元年庚申七月十六日辰の時、屋戸野入道に付して古最明寺入道殿に進め申し了んぬ。此れ偏へに国土の恩を報ぜんが為め也。』(421)

この安国論の奏上によって、三類の強敵さらに競い起り、『法師品』の「如来現在・猶多怨嫉・況滅度後」の文に違わず、大聖人に対する迫害は、日を追って激しくなりましたが、それらが重なれば重なるほど、迫害する人を善知識として受けとめ、隣愍を越えて却って恩として感じとっておられるのであります。

種々御振舞御書

「今、日蓮は末法に生れて妙法蓮華経の五字を弘めて、かかる責めにあへり……数々見擯出の明文は、但日蓮一人也……相模守殿こそ善知識よ。平ノ左衛門こそ提婆達多よ……日蓮が仏にならん第一のかたうどは、景信、法師には良観・道隆・道阿弥陀仏、平ノ左衛門尉・(相模)守殿ましまさずんば、争か法華経の行者とはなるべきと悦ぶ」(971)

即ち、値難そのものを悦びと感じ、恩と受けとめられたのであります。

さらに種々の法難を受けることによって、法華経の行者としての得証となるとして、次の『顕仏未来記』に切々と訴えられておられます。

「日来ノ災、月来ノ難、此の両三年の間の事、既に死罪に及んとす。今年今月万が一も身命を脱れ難き也…。幸なる哉、一生の内に無始の謗法を消滅せんことよ。悦ばしい哉、未だ見聞せざる教主釈尊に侍へ奉らんことを。願くは、我を損せる国主等をば最初に之を導か

ん。我を扶ける弟子等をば、釈尊に之を申さん。我を生める父母等には、未だ死せざる已前に此の大善を進めん」(742)

このご文章を拝すると、悲壮なご決意の中にも、その苦難を如何に悦びとして受けとめておられるか。而も、未だ見聞せざる教主釈尊、我れを損せる国主、我れを扶ける弟子(一切衆生)、我れを生める父母に恩を報ずることができるとしておられるなど、まさに宗教的極地というべきでありましょう。

その上、諫暁八幡抄で「一切衆生の同一の苦は、悉く是れ日蓮一人の苦と申すべし」と、人類すべての人の苦は、これみな日蓮の苦でもあるとの大慈悲心こそ、宗祖でなくしてはいいえぬお言葉と申せましょう。こうしたところに、宗祖の報恩観があると思うのであります。

末法に於けるわれらが報恩観

さて、以上雑駁ながら宗祖の報恩観について述べましたが、それでは、われわれは恩というものを、どう理解したらよいのか、この点について述べる必要があろうかと存じます。

宗祖は、恩というものを集約して四恩を挙げておられます。ところが、凡夫の浅智恵と申しましょうか、まことにくだらぬいい方ですが、恩はなにも四恩だけではないと思うのであります。例えて申しますなら、父母ばかりではなく、伯父さん、伯母さんの恩だってあると思います。また夫や妻、兄弟姉妹、逆に子に対する恩だってあると思います。さらにまた、職場に於ける先輩、同僚、後輩、そればかりではありません。自然科学の中にも数えきれないほど恩恵を受けているものが、沢山あると思うのであります。特に昔は、単純構造の社会でしたから縦横の線が割合いとはっきりしておりましたが、只今は複雑構造の社会とでも申しましょうか、お互いの人間関係なり社会機構が非常に複雑化してまいりましただけに、ただ四恩といっても納得できないものがあると思うのであります。

そこで考えられるのは、恩を四つに限定して、これは何々の恩と区別するのではなく、これらすべてに共通の恩というものがあってよい筈ではないかということであります。いわゆる、四恩を媒介として「共通の恩、本来の恩、根本の恩」があるべきだ、ということであります。

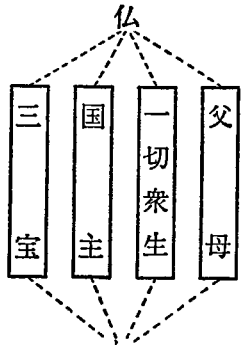
そうです!ありました。それが先きほどから申しております「仏恩」であります。

しかし、ただ仏恩と申しただけでは、なかなか理解ができません。そこで、なにが仏恩なのか、なんで仏恩をわれわれの「共通の恩、本来の恩、根本の恩」と受けとめなくてはならないのか。つまり仏さまとわれわれ(衆生)との関係を明らかにする必要があると思うのであります。

ところで、一寸横道にそれますが、最近の布教の欠点は、なんでもかんでも結論を急ぎ過ぎて、その過程、つまりプロセスというものを大事にしなくなりました。そのために折角のお話も、理解できずじまいで終ることがしばしばあります。

例えて申しますなら、私達はよく「お題目は有難い」とか、「お題目を唱えなさい」と簡単に申します。お題目の意義なり、有難いことを承知の人には、これで好いでしょうが、まったくお題目の「お」の字も知らない人からしたら、何にがなんだかさっぱり判りません。そこで必要になってくるのが、「なぜ」という疑問を解いていく、「教え」というものがなくてはならなくなってくるのであります。

先きほど申しました「共通の恩、本来の恩、根本の恩」である「仏恩」を知るには、こうした意味からも「仏さまとわれわれ（衆生）との繋がり」が解らないと理解しにくいということであります。



そこで、この解答をどこに求めるかという時に必要になってくるのが、『法華経』であります。

ご承知の如く、お釈迦さまが霊鷲山に於て無量義処三昧に入り、後に三昧より安詳として起って舎利弗に向ってお説きになられたのが、『妙法蓮華経方便品第二』というお経文であります。その『方便品』の中に、次のようなことが説かれています。

「舎利弗　如来但以一仏乗故　為衆生説法　無有余乗
若二若三　舎利弗　一切十方諸仏　法亦如是　舎利弗
過去諸仏
以無量無数方便　種々因縁　譬諭言辞　而為衆生
演説諸法　是法皆為　一仏乗故……舎利弗　未来
諸仏　当出於世……皆為一仏乗故……舎利弗　現
在十方無量百千万億　仏土中　諸仏世尊　多所饒益
安楽衆生　是諸仏……皆為一仏乗故……舎利弗
我今亦復如是……皆為得一仏乗　一切種智故」

「舎利弗、如来は但だ一仏乗を以っての故に、衆生の為めに法を説き給う。余乗の苦しは二、苦しは三あることなし。舎利弗、一切十方の諸仏の法も、亦是の如し。舎利弗、過去の諸仏も、無量無数の方便、種々の因縁・譬諭・言辞を以って、衆生の為めに諸法を演説

したもう。是の法も皆一仏乗の為めの故なり。……舎利弗、未来の諸仏の当に世に出でたもうべきも、……皆一仏乗の為めの故なり。……舎利弗、現在十方の無量百千万億の仏土の中の諸仏世尊の衆生を饒益し安楽ならしめたもう所多き是の諸仏も、……皆一仏乗の為めの故なり。……舎利弗、我れも今、亦復是の如し。……皆一仏乗の一切種智を得せしめんが為めの故なり。」

初めの「如来は但だ一仏乗を以っての故に、衆生の為めに法を説き給う。余乗の苦しは二、苦しは三あることなし」というのは、ご承知の開三顕一を述べているのであります。即ち、十方の諸仏も、過去の諸仏も、未来の諸仏も、また現在の諸仏も、更に今、霊鷲山に於て法華経を説いている我がお釈迦さまも、みんな過去にいろんな法を説き、現在も説き、これからも説かんとしているが、実はこれらは、総て一仏乗の為めなのだよ、という五仏同道を述べておられるのであります。

さて、では一仏乗とは、いったい何んなのでしょう。わかりやすく申しますと、仏さまが真に示そうとされた唯一の道、いい代えますと仏さまの真の教えは唯一つなのだということ、それを一仏乗というのであります。ではいったい、その唯一つの真の教えとは何んなのかということになります。

これは同じ『方便品』の中に、有名な欲令衆でお読みになっておられると思いますが、四仏知見を説かれた次のご文章があります。

「諸仏世尊　欲令衆生　開仏知見　使得清浄故　出現於世　欲示衆生　仏知見故　出現於世　欲令衆生　悟仏知見故　出現於世　欲令衆生　入仏知見道故　出現於世　舎利弗　是為諸仏　唯以一大事因縁故　出現於世」

「諸仏世尊は、衆生をして仏知見を開かしめ、清浄なることを得せしめんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生に仏知見を示さんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして仏知見を悟らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして仏知見の道に入らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。舎利弗、是れを諸仏は、唯一大事の因縁を以っての故に、世に出現したもうと名づく。」

前に挙げたお経文からみますと、文章があとさきになりますが、実は諸仏世尊は、われわれ衆生に仏さまの唯一の真の教えを、いろいろな形で知らさんが為めに、世に出現

されたのだ。そして、そのつまるところは、ただ「一大事の因縁」を、私達に教えんが為めなのである、というのであります。

即ち、仏さまは何の為めに世の中に出られたのかというと、それは「一大事の因縁」という、最も大事なことをわれわれ衆生に教えようと思って、世に出られたのだ、こういわれるのであります。

さて、ここで、では「一大事の因縁」とはいったい何んなのか、ということになります。そうです、実はこれこそ要中の要、大事中の最大事ともいう、仏さまとわれわれ、お釈迦さまと私達との繋り、これを「一大事の因縁」といわれたのであります。

この関係を明らかにしたのが、次に挙げる『譬喩品』の一節であります。

「今此三界　皆是我有　其中衆生　悉是吾子　而今此処　多諸患難　唯我一人　能為救護」

「今、此の三界は、皆是れ我が有なり。其の中の衆生は、悉く是れ吾が子なり。而も今、此の処は諸の患難多し。唯、我れ一人のみ、能く救護を為す。」

法華経の中でも、このお経文は有名なところで、お釈迦さまがわれらにとっては、主師親の三徳を具えておられる仏さまであるということを、お示し下さったところであります。

即ち、お釈迦さまは、「今此三界皆是我有」と、この世の中の総ては、みな私が支配するものですぞといって、この世の総ての「主」であることを、自ら宣言されたのであります。そして、「其中衆生　悉是吾子」と、生きとし生けるものの総ては、みんな私の子供であるといわれて、自らこの世の中の総ての「親」なることを示されたのであります。更に、「而今此処　多諸患難　唯我一人　能為救護」と、この世の中には、いろいろな悩みや苦しみ、患いが沢山ありますが、それを救うことのできるのは、唯一人私以外にはありませんと、人類救済の「師」なることを、自ら述べられたのであります。

このことは日蓮聖人も、『南条兵衛七郎殿御書』で、次のように述べておられます。

「此文の心は、釈迦如来は此等衆生には親也、師也、主也。我等衆生のためには、阿弥陀仏・薬師仏等は主にてはましませども、親と師とにはましまさず。ひとり三徳をかねて恩ふかき仏は、釈迦一仏にかぎり奉る。親も親にこそよれ、釈尊ほどの親、師も師にこそよれ、主も主にこそよれ、釈尊ほどの師主は、ありがたくこそはべれ。この親と師と主との仰せをそむかん

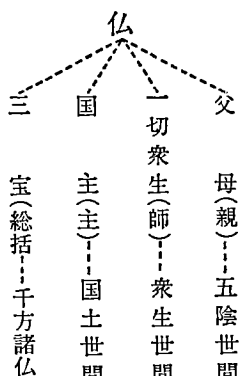
もの、天神地祇にすてられ奉らざらんや、不孝第一の者也」(320)

この世の中で、主師観の三徳を具えておられるのは、ひとり「釈迦一仏にかぎり奉る」と、いい代えますと、現在われわれが生きているのもお釈迦さまのお手配、生きようと努力するのもお釈迦さまのお差図、生かされていると自覚するのもお釈迦さまのお慈悲、いつでも見護って下さっている仏さま、いつでも苦しい時には救いの手を差しのべて下さる仏さま、それがお釈迦さまなのですよとお示し下さっておるのであります。したがいまして、われわれ衆生から、お釈迦さまをこのように拝するを「信仰」といい、それがご恩を「仏恩」というのであります。

しかし、世の中には、そう素直に受けとめる人ばかりはいません。否、誰れも信ずるものがいなかったが故に、大聖人は大難は四ケ度、小難は数限りなきご生涯をおくられたのであります。

そこで、前にも申しましたように、大聖人は、五濁悪世煩悩五欲の為めに道に迷っている衆生に対し、まずその道を正し、法華経の世界から人倫の道を示し、次いで仏と衆生との関係を規範として、「恩」を説かれようとされたのであります。それを具体的に示されたのが「四恩」であります。

実は、仏さま(お釈迦さま)の三徳を、わかり易くお示し下さったのが「四恩」です。ですから主師親の三徳を、四恩に配してみますと非常にわかり易くなります。



いわゆる、わが父母の中に仏さまの姿を見る。日蓮聖人も、「親の子を捨てざるが如く、子の母に離れざるが如くに……」と仰せになっていますが、親の慈愛そのものが仏さまの慈愛と受けとめられたのであります。一切衆生を「師」とされたのは、一切衆生を善知識と見て、「一切衆生なくば衆生無辺誓願度の願を発し難し。又悪人無くして菩薩に留難をなさずば、いかでか功徳をば増長せしめ候べき」と、仏の常住説法を一切衆生の中に見られたと思うのであります。国主に対する考え方はいろいろあると思いますが、わたくしはむしろ国土そのもの、いいかえると、自分が今いるその国に対する恩と見た方がよいと思うのですが如何でしょうか。三宝は、総括して十方諸仏の恩と見てよいと思います。

さて、こうした組立の中に三世間を配してみますと、なお具体的になってまいります。

これは、次に掲げる『御義口伝』に、

「今此三界の文は国土世間なり、其中衆生の文は五陰世間なり、而今此処、多諸患難、唯我一人の文は衆生世間なり。」

とあります。

前掲の図をご覧いただくとよく解ると思いますが、五陰世間というのは、個人を中心とした人間関係、親子はもとより、夫婦、兄弟姉妹、身内等、広く自分を中心とした人間関係をここに置きます。衆生世間というのは、個人の集まる一般社会を指しております。国土世間というのは、我々の住む国土、この世界、更に自然界をも含む宇宙全体をいいます。

さて、こうした図を見ながら、もういち度、我々衆生から仏さまを仰ぎみたとき、今まではお釈迦さまと我々が、一定の距離をおいて相対的立場にある方と思っていたのが、何にか身近かなところにおられる方という感じになりませんか。そうなのです。人間及び宇宙の一切のものは、全体を離れて「個」というものはなく、総てが網の目の如くつながっているのです。ここに十界互具・百界千如・一念三千というものがあるのです。

さきに挙げた四恩の一つ一つに、みな十界が互具されています。而もそれが、お互いに仏さまと我々とがこうつながって、網の目の如くになってまいりますと、自分が一人きりというのでなく、実は仏さまの懐の中に抱かれている自分というものを、知ることができると思うのであります。

「恩は一念三千ですよ」とは、ある学者さんのお言葉ですが、こうして見ますと、何にか判るような気がします。世の中の総てのものが、仏の懐の中に抱かれている。従って、仏さまの立場からするならば、自分一人だけが救われたのでは、本当の救いにはならない。みんなが救われなくてはならない。ですから、大聖人が一切衆生、総ての成仏こそ、わが成仏であり、父母の成仏であるとして、やむにやまれぬ気持ちからお題目をすすめられたということは、あれだ、これだと区別するのでなく、生あるもの総てに恩がある、恩を報じなくてはならないとする考えからと申せましょう。

実は、私は法華経の報恩はここにあると思うのであります。而も、この宇宙の総てのものは、みな仏の懐に抱かれている、まさにこれこそ事の一念三千というべきではないでしょうか。

故に、次に掲げる『守護国家論』にも、

「二乗は自仏を見ざるが故に成仏なし。爾前の菩薩も亦自身の十界具足を見ざれば二乗界の成仏を見ず。故に菩薩も仏を見ず、凡夫も亦十界具足を知らざるが故

に自身の仏界顕われず。」(124)

と述べておられます。いわゆる、十界互具を知らずして、自身の仏界がわかろうはずがないというのです。

先程も申しましたが、法華経の迹門に於ては、お釈迦さまと我々が、相対的立場にありましたが、本門に至りますと、十界互具、百界千如、一念三千というものによって、久遠が明らかとなり、三徳をかねて恩深き仏に抱かれている自分を知ることができると思うのであります。

『開目抄』の中にも、

「諸宗は本尊にまどえり。……例せば三皇以前に父をしらず、人皆禽獣に同ぜしが如し。寿量品を知らざる諸宗の者は畜に同じ。不知恩の者也。」(578)

と、こう述べておられます。

真の仏恩を知るには、やはり本門の寿量品に至らむば出てこない、いわば久遠が開顕されなくては恩の根源がわからない、いうならば、共通の恩、本来の恩、根本の恩というものが、ここにあると見なくてはならないと思うのであります。

知恩を最とす

さて、ではこの恩に私共が報いるには、どうしたら好いのか、ということになります。

私は、最初になぜ恩に報いなくてはならないのか、なぜ恩として感じなくてはならないのか、なにが恩なのかを明らかにしなくてはならない、ということを申しあげました。

それは、つまり報恩ということを強調する前に、知恩、即ち、我々の側からいうならば、知るということがなかったら、恩を報ずることもできないわけであります。では、何にを知る必要があるのか、ということになります。仏さまと我々衆生とが、一大事の因縁によって結ばれているのだという、この関係を知るということであります。

ところで、お経文の中で見る「知」という字には、「知ろしめす」という言葉と、「知る」という言葉があります。仏さまの側からすれば、知ろしめすとなるのでしょうが、凡夫の側からいえば、知るということです。ところが、この二つのことは非常に重要なことで、ここをなおざりにしては、本化の布教もなにも色が褪せてしまいます。

そこで仏さまは、『方便品』で私達に次のように教示しておられます。

「唯有諸仏　乃能知之　所以者何　諸仏世尊　唯以一大事因縁故　出現於世」

「唯、諸仏のみましまして、乃し能く之を知ろしめせり。所以は何ん、諸仏世尊は、唯、一大事の因縁を以ての故に、世に出現したもう。」

このお言葉に続いて、四仏知見が説かれるのですが、ここに仏さまは、一大事の因縁を私達に知らそうとされているのであります。

そこで私達は、この深い因縁をよくよく心得た上で、法を説かなくてはいけないと、次の『神力品』で述べておられます。

「於如来滅后　知仏所説経　因縁及次第　随義如実説」

「如来の滅后に於て、仏の所説の因縁、及び次第を知って、義に随って実の如く説かん。」

ちょっと横道に逸れるようですが、この頃のお説教なり法話には、仏の所説はもとより、その因縁も次第も、まったく無視したお話が大分多くなって来てるようです。ですから、そのお説教に義も出てきませんし、実も説かれていないということがしばしば見うけられます。これでは本化教団としての独自性ある布教とはいえなくなるのではないでしょうか。

報恩もそうだと思います。さき程も記しましたように、報恩の前にはまず知恩がなくてはならない。その知恩こそ、仏さまと我々衆生との因縁を知ることであり、知らせることであると思うのであります。

故に、日蓮聖人も『聖愚問答抄』で、

「我が釈尊の遺法を学び、仏法に肩を入れしより已来、知恩をもって最とし、報恩をもって前とす……唯、知恩を旨とする計り也。」(377)

と述べておられます。

恩というものは、まず知るということが先きで、そして、しかるのちに知らせるということであります。知るとは学ぶことで、知らせるということは、法を説くことであります。

故に、知恩を中心として考えた場合、上には、恩を知ることに依って、恩を感じ、恩を感ずることに依って、その恩に如何に報いるかという、真の報恩行が生まれ、下には、忘恩、不知恩の徒に対し恩を知らせると共に、それらの人間の多い現代のそのよってくる原因の追求と、時代的危機の把握、認識こそなされなくてはならない。いわゆる、上求菩提・下化衆生ということであります。

報恩↑感恩↑知恩→忘恩・不知恩→その原因と時代的危機

宗祖に対する報恩

さて、こうした上に立って、それでは七百遠忌を迎える我れらが、宗祖に対する報恩とは、一体どうすれば好いのか、ということになってまいります。

そこで、今まで記述したことを整理する意味も含めて、要点的に述べてみたいと存じます。

宗祖に対する報恩とは、今さら申すまでもないことですが、宗祖の願業に応えることであります。

宗祖の願業とは、次に挙げる『諫暁八幡抄』の、

「今、日蓮は、去る建長五年癸丑四月二十八日より、今、弘安三年太歳庚辰十二月にいたるまで二十八年が間、又他事なし。只、妙法蓮華経の七字五字を、日本国の一切衆生の口に入れんとはげむ計り也。」(1844)

という、四海帰妙の実現であります。

さて、では四海帰妙の実現とはということになるのですが、ここで普通にいうなら、世界中をお題目の世の中にするでよいのですが、そう結論を出す前に、我れらがご本仏であるお釈迦さまの誓願にこたえることこそ、その基盤となるなのだと知っていただきたいと思うのであります。

では、お釈迦さまの誓願とは何にかとなるのですが、それは、次の『方便品』に示されています。

『我本立誓願　欲令一切衆　如我等無異　如我昔所願
今者已満足　化一切衆生　皆令入仏道』

「我れ本誓願を立てて、一切の衆をして、我が如く等しくして、異ることなからしめんと欲しき。我が昔の所願の如き、今者、已に満足しぬ。一切衆生を化して、皆な仏道に入らしむ。」

この誓願である「欲令一切衆　如我等無異」とは、誰れもがお釈迦さまと同じような立派な人間になってもらいたいとの願いを込めたありがたいお言葉ですが、では、この願いにお応えするにはどうしたら好いのかということになります。

それには、仏界の中に住すること、否、住している自分を知ることである。いいかえると、前にも申しました如く、十界互具、百界千如、一念三千が、ここに出てくるのであります。

これを自覚し、知らしむるには、どうしたら好いかというと、現代の危機というものを認識し、その危機の中にいる自分を見つめ、危機の中にいる大衆に、末法の自覚を促すことである。では、危機である末法とはというと、次の『教行証御書』に、

「されば正法には、教行証の三つ倶に兼備せり。像法には、教行のみ有って証なし。今、末法に入っては、教のみ有って行証なく、在世結縁の者一人もなし。権実二機悉く失せり。」(1480)

と述べられている如く、まさに五濁悪世・闘諍堅固の本末有善の機をいうわけであります。

その本末有善の機なるが故に、同じ『教行証御書』に、

「此の時は、濁悪たる当世の逆謗の二人に、初めて本門の肝心、寿量品の南無妙法蓮華経を以って下種と為す。是好良薬　今留在此　汝可取服　勿憂不差とは是れなり。」(1480)

即ち、是の好き良薬である下種の題目・妙法五字が、ここに必要となってくるのであります。

その妙法五字を、お釈迦さまより託されたのが宗祖であり、本末有善の機を我れらに知らしめたのが、遣使還告の大聖人である。その大聖人におこたえすることが、我々の御報恩であるということになるのであります。

こうしてきて始めて、では再往、我れらが宗祖に対する報恩とは何にか、と問うたとき、妙法五字を如何に弘め、如何に伝え、如何に下種するかということになるのであります。

そこに、具体的な方策が必要となってくるわけであります。

遠忌布教の方策

以上論述したパターンで、遠忌布教の方策を考える場合、宗団全体の姿勢の問題と、教師全体の姿勢の問題とに分ける必要があると思うのであります。

そこで、はじめに宗団全体の姿勢の問題をみた場合、いま宗団が早急に行なわなくてはならないことは、現代の危機を、世法と仏法の二面にわたって解明し、教師全体に危機の実態を明示し、これを強く訴えなくてはならないと思うのであります。

正直いって今の宗団には、本化の門下としての悩みがない、否、悩み方を知らないといった方が、妥当ではないかと思うのであります。そう申しますと、そんな馬鹿な、とお小言をいただくかも知れません。確かに、宗団の運営、財政の確立、伝道教化の推進等、悩みがないどころか、悩みが尽きないのが現状かも知れません。

しかし、宗団として本代眼を向けなくてはならない社会問題の中に、実は余りにも大きな問題が山積しているのではないか。殊に公害の問題を始め、人口・福祉・老人、はたまた安楽死の是非等、多くの社会問題が、現代の危機として横たわり、宗教の立場としての解答を、早急に与えねならない時に来ていると思うのであります。

即ち、現代の危機が明らかになったら、日蓮宗として、教団として、この危機に起っているいろいろな問題を、どのように解し、答えを出していくか、この作業に取組むべきであると思うのであります。

もちろん社会問題ばかりでなく、宗団内に於ける教師の資質・養成にも多くの問題があります。

ともかく、いろいろな理屈をいう前に、土台を考える必

要があると思うのであります。それは、どんな家を建てる場合でも、土台となる基礎工事がしっかりしていなくては、すぐ倒れてしまうからであります。

次に教師全体の姿勢の問題ですが、布教者の立場としていわしていただけるなら、もう、これからの布教は、上意下達の布教から、共に悩み、共に語る布教に変っていかなくてはならないと思います。いわゆる、教師も共に悩み乍ら、新しい信徒を下種していく布教が、展開されなくてはならないと思うのであります。

こうした意味から、カウンセリング方式（人生相談）による布教を組織化し、一大下種運動を展開するのも一考かと思います。

これについては、特別布教方針の中にも、法座布教というかたちで掲げられておりますが、これは、宗祖のご在世中行なわれた布教形態に最も近いもので、実は誰れもが承知し乍ら、見過ごしている大事な布教方法の一つといえるのではないかと思うのであります。

私は、この布教を「介入布教」と名づけておりますが、例せば、四条金吾頼基公、あるいは池上御兄弟に対するそれなど、最もよい例と申せましょう。

更にこれを組織化すると、彼の熱原法難に於ける日秀・日弁――日興――日蓮という布教態勢こそ、今日の日蓮宗に必要なことではないかと思います。

ご承知の熱原法難は、下方（しもがた）・滝泉寺に於ける、その院代・行智と、片や日興上人の弟子である日秀・日弁との対立で始ったものであるが、これに対処する指示は、師匠である日興上人に依ってなされ、更にその上の指南は大聖人に仰いだという、いうならば段階的布教がなされていたのであります。

実は、こうした地についた布教がなされてこそ、統一信行も護法大会も効果が挙がるので、これを無視しての布教は、たとえ七百年の時代のへだたりはあるといっても、再考する必要があるのではないかと思います。

それにしても、日蓮宗の布教は遠忌だけで終わるものではありません。否、むしろ我々は、七百一遠忌からの脱皮をこそ考えて行動すべきかと思います。

この意味に於て、私は、デスカバー・リング（Descouering）の時代から、セカンド・クリエーション（Second-Creation）の時代、即ち、再発見の時代から第二の創造への時代へこそ脱皮する御遠忌にして頂きたいと願っております。

しかし、その根幹は、七百遠忌をお迎えする我々一人々々の慈悲ある行動こそ、脱皮への道ではないかと思います。

『法華経』の『譬喩品』に、

「長者聞已　驚入火宅　方宜救済　令無焼害　告諭諸

子　説衆患難」

「長者聞き已って、驚いて火宅に入る。方に宜しく救済して、焼害ならしむべし。諸子に告諭して、衆の患難を説く。」

と説かれてありますが、我々僧侶は、今こそ大衆の火宅の中にとび込み、その中で苦しむ衆生に手を指しのべる布教こそ欲しいものであります。

更に『報恩抄』で、

「日蓮が慈悲曠大ならば、南無妙法蓮華経は、万年の外未来までも流るべし。日本国の一切衆生の盲目をひらける功徳あり。無間地獄の道をふさぎぬ。」(1248)

と述べられていますが、日蓮大聖人の慈悲を、我が慈悲として、末法の我々こそが、慈悲の弘通に専念しなくてはならないと痛感するものであります。